



南町小だより

つよく かしく あたたかく

平成30年9月 3日

校長 福田 俊彦

「挑む」姿に

校長 福田 俊彦

6月のサッカーワールドカップの感動を引き継ぐように、この夏休みにも多くのスポーツ大会が催されました。そして、これまでもそうだったように、一人一人の選手の姿、言葉に心を揺さぶられることとなりました。努力を結果に結び付けることができた選手。その状況において全力を出しつつも自分の思いに届かなかった選手。当日、それまで以上の力を発揮することができた選手。

選手の姿、言葉から共通することが感じられます。それは「挑む」ということです。「挑む」姿はどのようにして生まれるのでしょうか。私は次のように考えます。明確な目標をもつこと。その目標に迫るための具体的な手段をもつこと。その実践を通して得られた成果、改善点を明確にすること。そして、計画を見直し次のステップへの歩みを進めること。新たな目標へ。

野球に取り組んでいる子供たちの話です。その子供たちにとっての目標は「打撃力を高めること」でした。子供たちは声をかけ合って、毎日、自主的に素振りを継続したそうです。目標をもって継続することだけでもすごいことです。互いに声をかけ合うことも素晴らしいことです。ただ、素振りに取り組んだこの子供たちはその上をいっていました。何だと思えますか。試合で打席に立った時の状況を想定した素振りを全員がしたことです。投げてくるボールのコース、球種、アウトの数、ランナーの場所等。想定できることはいろいろあります。そして、自分はどうするか考え、素振りをしたそうです。自分たちの解決すべき本質的な問題を明確にしていると考えます。取組の方法を工夫していると考えます。ここに「挑む」が働いたように思います。この経験を通して子供たちはどのような学びをしたのでしょうか。きっと、仲間意識を高めたことでしょうか。達成感を味わったことでしょうか。ここまで頑張った経験がこれから直面する困難を乗り越える支えになるでしょう。

このような「挑む」というサイクルは、スポーツに限ったことではありません。日々の生活の中でも、自分にとっての解決すべき目標をもつことができれば、このサイクルを創っていくことはできます。もちろん、結果が必ず伴うとは限りません。それでも、「挑む」中での学びは、ひとつ上の自分を創っていくことになるのではないのでしょうか。

南町小学校の子供は、これまでの学校生活でも、いろいろな場面で「挑む」を経験してきました。45分間の授業でも、遠足や移動教室等の校外学習でも、学級の目標に近づくための多様な活動でも、学校生活を創っていく代表委員会をはじめとする各委員会活動でも、各学級で行われている当番活動や係活動でも。

この2学期も、南町小学校の子供たちは、目標をもち、よりよい自分、よりよい生活を仲間とともにめざしていきます。子供の「挑む」姿を大切にし、学びの広がり、深まりを支えていきます。